

大学教育だより



RDHE 2008.3 No.5

Center for Research and Development of Higher Education

大阪市立大学
大学教育研究センター

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138
(全学共通教育棟5階)

<http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/>

CONTENTS 目次

大学教育だより No.5

Voice～学生の声

●法学部・理学部学生インタビュー 1

Campus Inquiry

●ウチの学部・研究科ではこんな教育を行っています！ 3
文学／工学／生活科学部・研究科

Center Now & Human

●大学教育研究センターはこんなところですよ！ 6

OCU Education News

●市大教育ニュース 8
CE(College English)とEnglish Cafeのお知らせ

アン ロゾ(Un roseau) No.9

●国田賢治先生

(都市健康・スポーツ研究センター) I～IV

Voice ～学生の声

法学部・理学部学生インタビュー

市大での4年間! —文系・理系それぞれの過ごし方

互いに知る機会が少ない文系と理系の学生生活について、今回は、大学教育研究センターの兼任研究員でもある、瀧川先生・坪田先生・ハッ橋先生がインタビューを行って下さいました。互いの学部に対しては、「場所がどこにあるかも知らない」など、漠然としたイメージしか持っていない様子でしたが、インタビューから少しはお互いの学生生活が見えてくるのでしょうか…。3人がそれぞれ、学部を選んだ動機から学生生活、卒業後の進路や後輩へのアドバイスなど、いろいろな質問に答えてくれています。

Q なぜ今の学部・学科を選んだのですか？

A 法学部生(以下、法): 弁護士になりたかったからです。市大は法学に力を入れていると聞いていたので、1回生から専門的な勉強をしたいと思ってきました。思い通り勉強をすることができました。先生方もしっかり厳しく教えてくれました。他の学部の話聞いても、法学部は大変だと思います。

理学部生A(以下、理A): 高校で理数コースに所属していたので、理系に進もうと考えていました。高校では化学と生物を選択していたので、工学部という選択肢がなくなって理学部に決めました。高校二年生の時に選択するのですが、物理を履修していたら、工学部を選んだ可能性もあります。

理学部生B(以下、理B): 大学受験が迫ってもなかなか何を勉強したいのかわからなかったのですが、ひとまず数学と物理がおもしろかったので、それを勉強してみようと思いました。人の役に立つ仕事をしたいと思って工学部も考えましたが、学科を決めると勉強できる内容が一つに絞られてしまうため、理学部で幅広い知識を身に付けようと考えました。





Q 3回生のときの代表的な1週間の学生生活を教えてください。

A 法:月曜日から金曜日まで、たいてい1限から3限までみっちり大学の授業を受けていました。授業の後は、サークルとアルバイトに力を注いでいました。授業時間以外は、あんまり勉強をしていません。土日も、勉強ではなくアルバイトをしていました。もちろん、テストの2週間前からは、アルバイトも休んでスケジュールを組んで勉強していました。

理A:1、2回生のときに専門科目以外の単位を取り終えたので、3回は専門の授業だけでした。週に6、7コマの講義があり、火、水、木曜日の午後には8コマ実験がありました。基本的には1人で行う実験でした。その他の時間はレポート作成に追われていました。土、日は飲食店でアルバイトしていました。

理B:同様に、3回は専門の授業だけでした。平均して1日2コマの講義があり、木曜日の午後は実験でした。その他は、週2日遅くまで部活動に参加していました。土日は試合があることが多かったです。アルバイトは前期だけやっていました。

Q 今までの学生生活でおもしろかった勉強は何ですか？

A 法:いっぱいあります。民法とか労働法は、すごく身近だしこれから役立つそうだったので、とても興味深く勉強できました。国際法や国際経済法は、まさに教養という感じで、ニュースを見てその背景を理解するのに役立ちました。日経新聞が読めるようになりました。法哲学は、法学っぽくなくて、こんな視点もあるのかって気づくことができました。

理A:全学共通教育科目は、当時の自分の興味に合わせて選んでいましたが、あまり記憶に残っていません。専門科目は、必要な知識が満載なので、真面目に勉強したし今も覚えています。先生が学生に向かってしゃべりかけるように話し、自分がわかるように教えてくれた授業はやはりおもしろかったです。

理B:おもしろいというより、全学共通教育の授業で見たビデオが印象に残っています。物理の授業は、1、2回生のうちはよくわかりませんでした。3回生になって基礎が少しずつわかるようになると、授業も理解できておもしろみを感じられるようになりました。教科書に無いことも喋ってくれた授業はおもしろかったです。

Q 卒業後の進路は？

A 法:人材ビジネスに興味があるので、人と企業のマッチングをサポートしていきたいなと思っています。やはり働きたいです。

理A:理系なので高校の時から大学院に進学するものと

思っていました。一時期は就職するか迷いましたが、学部で卒業しても、目的の職に就けるかわからないのが理系なので、市大の修士課程に進みます。修士修了後は、就職しようと思っています。

理B:同様に、市大の大学院に進学します。できれば勉強したことを生かして働きたいので、修士までは進むものだ、と思ってこれまでやってきました。企業では研究職を希望するつもりです。

Q 卒業後の進路のためにがんばっていることはありますか？

A 法:会社で内定者アルバイトをしたり、関連するニュースに注意したりしています。とても忙しい会社なので、忙しさに慣れる訓練や、へこみ準備を着々としています。

理A:進学が決まる前は、大学院入試を通過するために、今までの復習をしてきました。今は、卒業研究をやっています。

理B:外国の研究者と接する機会があるので、英語を話せないと大変だと思い、ラジオの講座を聞いて勉強していますが、今はお休み中です。

Q 大阪市立大学での4年間を振り返って、後輩へのアドバイスをお願いします。

A 法:自ら動く、という事を大切にしたいです。市大の学生はちょっと活気のないところがあるけれど、自分で主体的に動かないと後悔すると思います。大学生活を楽しむためには、積極的に行動することがとても大事だと思います。

理A:卒業を目指して単位を取ってだけでなく、アルバイトや資格の取得など自分を成長させる経験を積むべきです。それをやる時間は十分にあります。

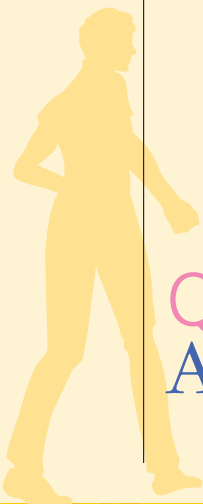
理B:自分がやりたいようにやるのが一番ですが、勉強は一生懸命やるべきです。

〈インタビューを行った先生方からのコメント〉

●「大学から提供される素材を自分なりにどう調理するかで、学生生活4年の間に、大きな違いが出てきそうです。学生一人一人が『お客様』というより『シェフ』なのです。」
——(法学研究科准教授 瀧川裕英)

●「インタビューに答えてくれた理学部の二人は、典型的な理学部生です。今回の企画からも、文系と理系の違いの一端は浮き彫りになったように思います。せっかく総合大学で学んでいるのですから、サークルやクラブ活動以外にもっと学部を超えた交流があると良いでしょう。社会に出てからは理系も文系も一緒に働くのですから、先入観を払拭する意味でも大学にいる間に理系、文系の実態を知るのには意味があることです。」

——(理学研究科教授 坪田誠、講師 八ッ橋知幸)

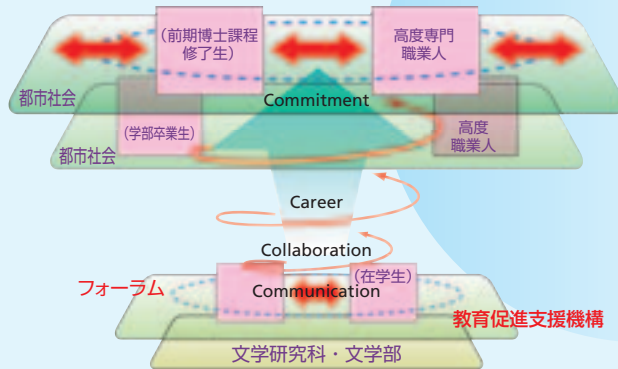


●ウチの学部・研究科では
こんな教育を行っています！



文学部・文学研究科教育促進支援機構

文学部50周年を機に設立された教育促進支援機構は、学生(学部学生+大学院学生)を主役とする、全国でも類を見ないユニークな組織です。教育促進支援機構は、学生の教育、研究、進路を支援すべく、5つのチームを擁しており、そこでは、学生の立案した企画が、学生自身の手によって——教員はあくまで縁の下の力持ち的サポート役に徹します——つぎつぎと実現されています。



挑戦 教育促進支援機構の 文学部・文学研究科

C. 進路支援

進路支援事業では、毎週「メールマガジン」を配信して、就職や進学を目指す文学部生(大学院生も含む)に役立つ情報を提供したり、ほぼ月一回の割合で「文学部生向け進路支援セミナー」を開催し、自己分析法、面接対策、内定者体験談、就業体験講演など、みなさんが進路(一般就職・公務員・教員・大学院)を決定していく上での有効なアドバイスを行なっています。



D. 編集

編集委員会は、教育促進支援機構の機関誌『フォーラム人文学』の編集作業をおこないます。支援機構の活動報告や、優秀卒論・修論、各コース紹介など、文学部・文学研究科の活動を伝えるメディアを世に送り出すとともに、一冊の雑誌をゼロから作りあげる達成感や、出版編集実務のイロハを学ぶのにも最適の機会を提供しています。



4つのC

教育促進支援機構は、理念として、

- 社会に積極的に **Commitment** 可能な、その向上に寄与しうる人材を育てる
- 会員の **Collaboration** による
- Communication** 能力を向上させ、新たな可能性を創発させる
- 学生の **Career** 形成を実現する

の「4つのC」掲げています。じっさい、この教育促進支援機構の事業にかかわることで、学生たちは、おおきな成長をみせています。

5つのチーム

A. 教育支援

教育支援では、文学部生の教育環境をより良くするためにさまざまな活動をおこなっています。具体的には、「新入生歓迎キャンプ」「先輩学生によるコースガイダンス」「教育相談」などによる、大学生活の基本的な部分の支援、「第2部目安箱」、そして、「外国語勉強会」などによる文学部生の主体的活動の促進、さらには、「TOEFL道場」「留学支援セミ



ナー」「留学生との交流会」などの国際教育の場の提供もおこなっています。



B. 研究支援

研究支援は、文学部生の自主的かつ主体的な知的探求創造の活動全般を支援しています。具体的には、学生が集まった研究会や勉強会への助成、卒論に悩む人のための「卒業論文セミナー」や「レポート・セミナー」、大学院生がじぶんの研究をひろく報告する「院生研究フォーラム」や学生間の交流を深める「文学カフェ」などのオーガナイズ、書評賞、研究奨励賞、優秀卒論・修論賞などの企画と審査などをおこなっています。



E. 広報

広報は、内外へ向けての、教育促進支援機構の宣伝、その事業普及のため、チラシやパンフレットを作成したり、公式webサイトの作成・更新や、各事業の記録(写真や動画)を行なうセッションです。もちろん、mixiやメールングリストや壁新聞なども計画中です。

学生たちが積極的に参加し、自律的システムとして順調に運営されているすがたを見るにつけ、学生たちの持つ可能性の大きさに、あらためて驚かずにはいられません。われわれ教師たるもの、積極的関与が望まれる所以です。

文学部・文学研究科教育促進支援機構事務局長
文学研究科准教授 福島祥行

●ウチの学部・研究科ではこんな教育を行っています！



モチベーションを高める 工学部独自の 初年次教育

工学部の初年次教育

本学工学部は、機械工学、電気工学、応用化学、建築学、都市基盤工学、応用物理学、情報工学、バイオ工学、知的材料工学、環境都市工学の10学科より構成されています。工学部の各学科は社会の期待や学生からの要望も十分考慮し、独自の学習・教育目標をもとにした特色ある教育プログラムを提供しています。また、工学に携わる技術者・研究者は高い倫理性を持つ必要があることから、各学科が連携して学部単位で「技術者倫理」を提供し、工学部全学生の必修科目としています。さらに、定期的に教員全員が参加するFD集会を開催し、各学科の取り組みや教育上の問題点を議論し、よりよいプログラムの構築に役立てています。これらの取り組みが評価され、すでに8学科の教育プログラムが日本技術者教育認定機構(JABEE)による認定を受けています。(詳しくは工学部HPをご覧ください。)

教育プログラムを成功させるためには、学生各自が入学から卒業まで継続して高い学習意欲(モチベーション)を持つことが重要です。それには初年次教育が大きなウエートを占めると考えられます。そこで工学部では、カリキュラム初年次から各学科独自のユニークな取り組みを行っています。今回はその中で、バイオ工学科の初年次教育カリキュラムを紹介します。



学科特論 : 1回生前期に、各教員が1回ずつ担当し、自己紹介や研究内容の簡単な説明を行います。研究内容を完全に理解するのは難しいようですが、これによって1回生は全教員の顔を覚え、親近感も湧くようです。

研修合宿 : 毎年9月下旬、泉南にある大阪府立青少年海洋センターにおいて、1泊2日で1回生を対象に研修合宿を行っています。1回生と教員全員、および大学院生を含む上級生10数名が参加します。セミナーでは、学科の教育プログラム、大学院制度、卒業後の進路などの説明はもとより、大学時代に身につけ

ておいて欲しいことなど、教員から熱いメッセージを伝えます。また、実際に社会で活躍する卒業生をゲストとして招き、自らの経験をもとにした様々なお話をしてもらっています。他にも、模擬グループ面接や本学文系学部の先生の講演などバラエティーに富んだプログラム構成になっています。テニスやヨット、茶話会も行い、学生と教員、あるいは学生どうしの交流を深めます。入学直後の慌ただしい時期より、学生生活にも慣れた9月の方が、じっくり話を聞き、将来のことを考えるのに適しているようです。

学科演習 : 後期に1回生が数名単位のグループに分かれ、各研究室の取材をします。取材方法はすべて1回生が自ら考えます。教員や大学院生へのインタビューなどを行い、研究内容から大学院生の日常生活まで研究室に関わる様々なことを調べます。最後にはそれらをまとめて発表してもらいますが、発表内容だけでなく、アポイントメントの取り方や

インタビューでの話し方などの評価、指導も行います。

アンケート調査の結果、これらの初年次教育カリキュラムは1回生にかなり好評のようです。「研究室の雰囲気がよくわかり、先生や先輩に質問や相談がしやすくなった」「早い段階で将来の目標を考える機会が与え

られ、勉強にもやる気が出た」といった感想が多く聞かれています。このような反応から、これらの取り組みは学生が早期に工学部やバイオ工学科の営みに自己同一化するために有効な手助けとなっていると思われます。今後も学生の意見を取り入れながら、効果の高い初年次教育を行っていきたいと考えています。

大学教育研究センター兼任研究員
工学研究科教授 **日野泰雄**

大学教育研究センター兼任研究員
工学研究科教授 **長崎 健**

工学研究科准教授 **立花太郎**

●ウチの学部・研究科では
こんな教育を行っています！



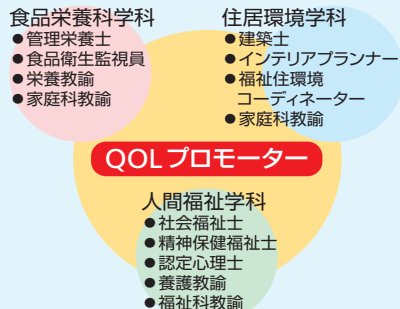
生活科学学部では、現代GPプログラム（事業名称：QOLプロモーター育成による地域活性化）として、QOL(Quality of Life: 生活の質)をテーマに3学科の学生・教員が横断的に研究・実践活動を行っています。そして、学内だけでなく、学外の福祉系・心理系・保健系専門職や地域住民との意見交換や施設見学ツアーなどでさまざまな人々と関わり、さまざまな立場からQOLを考えていく取組みも行っています。

このプログラムでは、まず、学生の自主的な学習意欲を高めるために、学生の主体性を尊重した参加型教育を中心とし、生活問題が机上の学問のみでは解決できず、多様な職種間の連携により解決していくことが重要であることを強調しています。さらに、従来の学科別のスペシャリスト養成に加え、「健康」「環境」「福祉」について総合的に理解ができ、生活全般のニーズに対応できるジェネラリストの養成も、このプログラムの重要な目的になっています。

また、このプログラムでは、教員による学生教育のみならず、専門職・住民と学生・教員が相互に議論することで、双方向的学習が行われ、学生の創造性が高

生活科学学部 現代GPプログラム 「QOLプロモーター育成による地域活性化」 生活全般のニーズに対応できる ジェネラリストを養成

められるような工夫がなされています。具体的には、大学の教科科目で学んだことを応用し、演習で、さまざまな立場から、学生・教員と専門職・住民が相互に議論し合う場が設けてあり、そこで、学生の創造性が発揮できるように、学生独自の生活問題の解決の方法を表現し、問題解決の方法を実践的で具体的に学べるようになっています。また、このよう



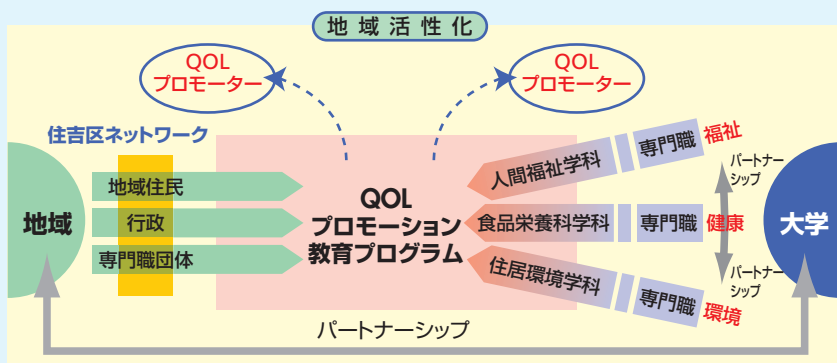
学生は各学科で提供される資格に加えて、人々の生活の質を高めることを目指したQOLプロモーターとしての能力も得て、社会に輩出されています。

演習は、学生のコミュニケーションやプレゼンテーション能力の向上にもつながられるように工夫されています。

このプログラムは、従来、スペシャリスト養成にしか目を向けることができなかった状態から、異なるスペシャリスト養成を同一の場で実施することで、ジェネラリストとしても成長できる教育プログラムであり、生活科学部の特徴を十分に生かしたプログラムとなっています。

今後、このプログラムをさらに発展させていくために、以下の4つのことが企画として考えられています。

- 1) QOLプロモーションの開発と体系化について、これまでの成果を通じて得られた情報を整理しながら、QOLプロモーション手法の体系化を図り、教科書や参考書にできるような書籍にまとめ上げ、生活科学の学部教育のモデルとなるような教科書づくりを行っています。
- 2) QOLプロモーション教育プログラムの新規中核科目を充実させ、正規授業科目として開講、単位認定し、QOLプロモーションを生活科学部の重要なテーマとして位置づけ、さらに魅力的な学部教育プログラムに発展させていこうと考えています。
- 3) 夜間・休日公開講座を開講し、学外からの受講生(地域住民や専門職など)の意見を反映させながら、プログラムの充実を図っていこうと考えています。
- 4) インターネット講座を充実させ、これまで得られたさまざまなQOLに関する情報や学部で実施された教育内容を積極的に発信し、地域に貢献していけるプログラムづくりを目指そうとも考えています。



地域の横断的組織(住吉区ネットワーク)と連携し、本学部を構成する3学科の教員・学生と、地域の多様な専門職や住民が協働して解決方法を学び、考えるマルチプレックス・フィールドワーク教育(複眼的視点修得のための演習)をコアとするQOLプロモーション教育プログラムを開発します。

大学教育研究センター兼任研究員
生活科学研究科准教授 岡田進一

●大学教育研究センターは「こんなこと」に「こんなメンバー」で取り組んでいます！

FD活動

(1)FD研究会(年1回)

FD研究会は、大阪市立大学における教育の向上を図るための組織的な研修や教育に関する研究活動の成果に関し、全学的な交流をはかる場として設定されています。毎年、100名前後が参加する大きな研究会です。2007(平成19)年度の全体テーマは「学生が自立的に学べる・学び続ける大学教育をどう実現するかーカリキュラム・授業方法・評価の連携ー」でした。



(2)教育改革シンポジウム(年1回)

教育改革シンポジウムは、全学的に共有が可能なホットトピックについて、大学内外の情勢を鑑みながら考えを深めることを目的に開かれています。第14回目を迎えた2007(平成19)年度は、講師に小笠原正明東京農工大学大学教育センター教授・館昭桜美林大学大学院国際学研究所教授を招き「大学院重点化時代の学士課程教育システムを考える～質の高い教育のためのカリキュラムマネジメントと単位制度実質化～」をテーマに開催しました。

(3)FDワークショップ・大学教育研究セミナー(年2～4回)

FDワークショップと大学教育研究セミナーは、ワークショップ形式またはラウンドテーブル形式等を取り、主に学内の参加者間で教育実践事例や大学教育にかかわるホットトピックの紹介とそれらについての意見交換を行う場として設定されています。

研究成果の発信と広報

(1)大阪市立大学大学教育研究センター紀要『大学教育』

主として本学の教育に資する研究成果の発表の場として、学内はもとより全国から投稿を募り、年に1～2回発行する、査読付きの学術雑誌です。センターのFD活動・研究活動の報告の場でもあります。

(2)大学教育だより & Un Roseau(アン ロゾ)

教員および学生を対象として、大阪市立大学におけるさまざまな教育への取り組みをまとめた広報誌『大学教育だより』を年1～2回発行してきました。また、大阪市立大学での学びの道しるべとして全学共通教育総合教育科目ガイドブック「アン ロゾ」を発行し、学生の皆さんに配布してきました。前回からこれら2冊を合冊として、より充実した内容として発行し、一層幅広く配布することとしました。

研究プロジェクト

センターで現在取り組んでいる研究プロジェクトは大きく、「学士課程教育のあり方」についての研究としてひとくくりにすることができます。

学士課程ということばは大学関係者の間でもはまだあまり馴染みがないかもしれませんが、英語でいう undergraduate 段階を指すことばとして定着し始めています。その背景には、1991年の学

校教育法等の改正により、学士がたんなる称号から学位(大学で与えられる最初の学位という意味で第一学位と呼ばれたりします)の一つになったということが挙げられます。高等教育のグローバル化、学生の流動化がすすむ今日、学士という学位にも国際的に共通の質を保つことが求められるようになってきています。日本でも最近では中央教育審議会の大学分科会が大学卒業までに学生が最低限身につけなければならない能力を「学士力」と呼んで定義しようとしています。

こうした動向をふまえて、大学教育研究センターでは、次のようなテーマで研究しています。

(1)学士課程教育の重要課題

学士課程教育の重要なトピックとして近年とくに注目されるようになってきているのがキャリア・デザインやクリティカル・シンキング(批判的思考力)、ジェネリック・スキルと呼ばれる汎用的能力の育成などが挙げられます。これらは専攻分野の別なく学士課程教育が共通に目指すべきものとして国際的にも注目されており、日本でもにわかに関心が高まっている大学教育の重要課題だといえます。センターではこれらのトピックについて研究員が手分けして研究に取り組んでいます。

これらにかかわってすでに取り組んだテーマは「初年次教育のあり方」です。初年次教育とは、高校から大学へのスムーズな移行を支援し、初年次の学生がそれ以後の学習のために必要なスキルや知識を身につけることを目指す教育の総称で、ガイダンス、カリキュラムの一環としての授業科目、学習相談・支援などが含まれます。センターでは、2007年3月まで2カ年にわたって、文部科学省大学振興課の委託を受け、大阪府立大学と連携して「今後の初年次教育のあり方に関する調査研究」を行いました。その成果は報告書にまとめられていますが、センター紀要『大学教育』第5巻第1号にも一部掲載されています。

(2)数学・理科基礎調査

数学・理科基礎調査は、理学部・工学部・医学部・生活科学部(2学科のみ)の新入生を対象に、4月のガイダンス時に数学・理科のそれまでの学習状況と基礎的学力を調査することから大学におけるその後の理数教育の実践に生かすとともに、学士課程における科学教育の課題を明らかにしようというものです。すでに2006年、2007年の2年にわたって行い、データの集積と分析をすすめています。

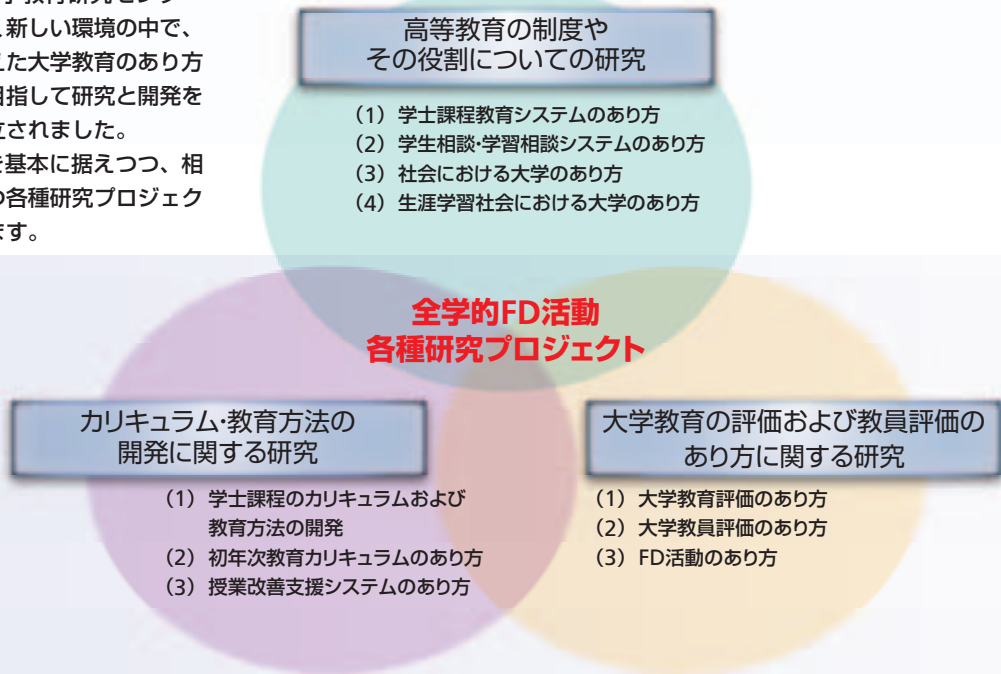
(3)授業改善・カリキュラムの評価

本学では授業改善に生かすという趣旨から、全学共通教育において学期末に学生による授業アンケート調査を長年実施してきました。そうした経験をふまえて、センターでは授業改善に役立てるためにはアンケート調査はどうあるべきか、またアンケート調査の結果はどのように授業担当教員によって役立てられているかを検討しています。その一環として、2007年にははじめて学期の中間で授業アンケートを実施し、結果を後半の授業の改善に生かせるような方法を試行しました。また、学生による授業アンケートだけではなく、授業科目(コース)の評価をも視野に入れてカリキュラムの評価のあり方についても検討し始めています。

大学教育研究センターの研究

大阪市立大学 大学教育研究センターは、大学を取り巻く新しい環境の中で、社会の進路を見据えた大学教育のあり方を実現することを目指して研究と開発をすすめるために設立されました。

下記の3本の柱を基本に据えつつ、相互に強く関連をもつ各種研究プロジェクトに取り組んでいます。



高等教育の制度やその役割についての研究

- (1) 学士課程教育システムのあり方
- (2) 学生相談・学習相談システムのあり方
- (3) 社会における大学のあり方
- (4) 生涯学習社会における大学のあり方

カリキュラム・教育方法の開発に関する研究

- (1) 学士課程のカリキュラムおよび教育方法の開発
- (2) 初年次教育カリキュラムのあり方
- (3) 授業改善支援システムのあり方

大学教育の評価および教員評価のあり方に関する研究

- (1) 大学教育評価のあり方
- (2) 大学教員評価のあり方
- (3) FD活動のあり方

FDとは？

ファカルティ・ディベロップメント(Faculty Development)の略で、大学教員の職業的な資質向上のための活動のことです。大学教員の職務には、教育だけでなく、研究や組織のマネジメントもあるので、FDとは広くそれらにかかわる能力開発ということになりますが、主として教授能力の開発をさす言葉として使われています。教授個人の教授力の向上だけでなく、大学組織全体の教育力の向上のために行う組織的な取り組みの総称です。

大学教育研究センター研究員の紹介(平成20(2008)年3月現在)

▶ 所長

中村 圭爾 副学長



▶ 専任研究員

矢野 裕俊 副所長 大学教育研究センター教授

●研究分野：生涯学習社会における学校教育の役割／学校カリキュラム

大久保 敦 大学教育研究センター准教授

●研究分野：高校大学の接続／自然科学教育／古植物学

西垣 順子 大学教育研究センター准教授

●研究分野：大学教育の評価に関する研究／教育心理学

飯吉 弘子 大学教育研究センター准教授

●研究分野：社会における大学のあり方に関する研究／教育学／大学教育史

渡邊 席子 大学教育研究センター准教授

●研究分野：教育支援・授業支援システムの開発／社会心理学

▶ 兼任研究員

青山 和司 経営学研究科教授

坂上 学 経営学研究科准教授

中村 健吾 経済学研究科教授

瀧川 裕英 法学研究科准教授

早瀬 晋三 文学研究科教授

松浦 恆雄 文学研究科教授

辻本 英夫 文学研究科准教授

坪田 誠 理学研究科教授

八ッ橋知幸 理学研究科講師

日野 泰雄 工学研究科教授

長崎 健 工学研究科教授

岩井 一宏 医学研究科教授

小山田浩子 医学部看護学科教授

岡田 進一 生活科学研究科准教授

大西 克実 創造都市研究科准教授

国田 賢治 都市健康・スポーツ研究センター准教授

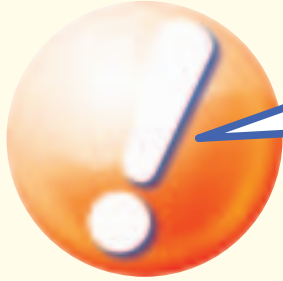
▶ 事務局

染川 章文 学生支援課長

宮崎 宗久 学生支援課係長

大谷 敏恵 学生支援課員

●お知らせ—— College Englishを受講するみなさんへ



CEを受講する学生は
共通テストを受験する必要があります。

- ①受験しないと単位が認定されません。
- ②スコアは成績に反映されます。
- ③スコアに基づきクラス分けされます

(1年前期は大学入試センター試験の点数でクラス分けをします)

このように**重要**なテストなので**かならず**受験してください。

共通テストは学期末に実施されます。
テストの日時などは掲示でお知らせするので、**掲示板に注意してください。**

実施するテスト (VERSANT) はコンピュータを使った音声テストです。VERSANTでは、高度な音声認識システムと自動採点システムを用いて自動採点されているので、面接官による差異などの主観性がなく、きわめて客観的に採点が行われます。



English Cafeには15台のPCが設置されているほか、英語の新聞や雑誌、CD、DVDなどが置かれています。英語を学びたい学生であれば、だれでも自由に利用できます。場所は全学共通教育棟(8号館)5階です。

OFFICE HOUR

**ネイティブの先生と
楽しくおしゃべりしませんか!**

English Cafeでは、
月曜日、水曜日、木曜日の午後4時30分から1時間、
OFFICE HOURを設けています。
この時間にネイティブの先生がみなさんをお待ちしています。
なにを話すのも自由。楽しい時間をお過ごしください。



★大阪市大の学生は1年次と2年次にCollege Englishを履修します。

College English (CE) は ①1年次はネイティブ・スピーカーの教員が授業を担当(一部例外あり)、②1クラス25名程度の少人数制といった特徴がある英語のクラスです。

英語教育開発センター